
下着は何

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

下着は何

【Nコード】

N1384I

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

女の子達はクラスの男達の下着は何がいいのかあれこれと話していた。ところが男の子は男の子で。この年頃はどうしても異性が気になってしまいます。

第一章

下着は何

「やっぱり男の子の下着ってね」
「そうそう」

女の子達が教室の中で。一つの席に集まってあれこれと話をしていた。

「やっぱりあれよね。トランクスよね」

「それかボクサーパンツ」

男の下着の話をしているのだった。それも笑顔で。

「どっちかよね、やっぱり」

「ビキニなんてどう？」

そしてその中の一人が言ってきた。

「ビキニパンツは」

「ビキニ!？」

「それかブリーフよ」

そうした下着のことが話されるのだった。

「そっちはどうかしら」

「ああ、あれは駄目よ」

「ださいっていうか最低？」

「そうよね」

皆ブリーフと聞いて一斉に顔を顰めさせる。そうしてそのうえで言うのだった。

「駄目よ、あんなの」

「小学生じゃあるまいし」

「小学生どころか今時幼稚園の子でもブリーフはないわよ」

さらに言うのであった。ブリーフというものに対して。

「あれはいてるの見たらね。絶対萎えるわよね」

「萎えるって。私の彼氏トランクスだけけど」

「私のもよ」

何気にかなりばらししているが皆それにはお構いなしで話していくのだった。

「お風呂上りとかさ。お父さんがブリーフなんかで出て来たらどう？」

「もう最悪」

これが彼女達の共通した意見であった。

「もうね。やっぱりトランクスよ」

「あれさっぱりしてていいしね」

「清潔？っていうか」

それぞれ話をしていくのだった。男ものの下着の話を。

「ズボンにもライン出ないしね」

「それがまたいいのよね」

「ブリーフだとライン出るしね」

下着のラインがあるのである。それが嫌だというのだ。

「何につけてもブリーフってねえ」

「あの前のポケットの部分だって」

それも嫌だというのである。

「何もかもが嫌よね」

「ビキニも嫌だけれどね」

「いやらしいのよね、ああいう下着って」

本当に口々に好き勝手に話す。そのうえ顔を顰めさせてだ。

「もうお父さんとかお兄ちゃんがそんな下着だったらね」

「強引に替えさせるわよ」

「弟もね」

つまり彼女達の周りにいる男連中は全員トランクスということだった。少なくともブリーフやビキニパンツはいないことがわかる。

「あのほら、漫画の」

ブリーフの話はそれでも続くのだった。

「目の細いスナイパーいるじゃない」

「ああ、あの人が後ろに立つと殴る人ね」

「あの滅茶苦茶変な人」

彼女達にかかればあのスナイパーも変な人でしかないのであった。

「あの人ってブリーフじゃない」

「しかも白よね」

「グンゼ！？若しかして」

またここで皆目を顰めさせるのだった。

「何か子供じゃない、完全に」

「そうよね。あの最悪の下着」

「白ブリーフで窓のところに堂々と立って」

最初の登場シーンである。この登場シーンもかなり有名ではある。

「それで誇示するけれどね」

「あれも最悪っていうかね」

こう話していくのであった。漫画のキャラクターまでブリーフと
いうことで叩かれている。

「せめてボクサーパンツにして欲しいわよね」

「あつ、あの下着よくない？」

「格好いいわよね」

皆ボクサーパンツに関してはかなり寛容であった。トランクスと
同じ位。

「何かぴっしりってしててね」

「トランクスみたいでもっとスマートで」

さらに話されていくのだった。

第二章

「何かスポーツマンって感じでいいわよね」

「そうそう」

「昔の禪なんてどう？」

「今度はこの下着まで出て来たのだった。」

「禪。どうかしら」

「あはは、今時そんなのないわよ」

「そうそう」

それは皆で笑って否定するのだった。

「禪はね。ないって」

「今そんなのはいてる人いないわよ」

「けれどあれもよくない？」

それでも一人が言うのだった。

「もうさ。日本男児って感じで」

「そういえば昔の海軍って禪なのよね」

「当たり前だけれどね」

帝国海軍の禪は海軍の特別の禪だった。これは海に落ちた時を考慮してのことであるという。

「海軍っていえば格好いいけれど」

「じゃあいいかも」

そんな話にもなるのだった。

「あの軍服を脱いだら禪っていうのもね」

「いいんじゃないの？」

「やっぱり日本男児よね」

この日本男児ということがとにかく強烈な魅力になっていた。

「禪ってね」

「けれどねえ。実際に禪っていうと」

しかしここでまた一人が困ったような顔で言うのだった。

「もういないのよね」

「赤禪なんかいいと思うけれどね」

「そう？禪っていったらやっぱり白じゃないの？」

「それかしら」

少なくともブリーフやビキニよりはずっといい評価であった。

「お相撲さんの禪も悪くないけれどね」

「それでもねえ」

こんな話をしていく。彼女達はかなり乗っていた。しかしであった。そんな彼女達を見ているクラスの男組はどうにも難しい顔をしているのだった。

「一体何の話をしてるんだよ」

「全くだよ」

こう言って難しい顔をしていた。

「男の下着なんてどうでもよくないか？」

「なあ」

「そんなのな」

これが彼等の意見だった。

「そんなのよ。どうでもな」

「何でそんなの気にするんだ？」

「訳わかんねえよ」

こう口々に話すのだった。

「本当に、そんなのよ」

「変な話だよ」

「まあそれでもな」

だがその中で一人が言うのだった。

「御前下着なんだよ」

「ああ、俺？」

「俺もか」

ここで他の男子達は彼の言葉に顔を向けるのだった。

「俺の今の下着かよ」

「何かってかよ」

「ああ、それだよ」

彼はそれだと指摘するのだった。

「御前等今何だ。俺はトランクスだけれどよ」

「ああ、俺も」

「俺もだよ」

彼等はすぐに答えるのだった。トランクスだと。

「だからよ、ブリーフなんてよ」

「あんなのよ」

「だせえんだよ」

こう言って皆あからさまに嫌うのだった。

「童貞パンツなんてよ」

「冗談じゃねえぜ」

「俺の彼女の前にあれはいて出られるかってんだよ」

「なあ」

皆口々に言い合う。彼等も彼等で自分達でばらしていることに気付いてはいない。

第三章

「それってよ。そうだよな」

「だよなあ」

「とにかくあんなのもう誰もはかねえよ」

「男の下着はトランクスだよ」

「それかボクサーだよ。それしかねえよ」

彼等の意見はこれであつた。しかしここでまた一人が言った。

「でよ、それでだけだよ」

「何だ？」

「どうしたんだ？」

「高見だけだよ」

あれこれ話している女の子達のうちの一人、はつきりとした大きな目で唇の紅い女の子を見て言うのだった。はつきり言って美人の彼女をである。

「今日は何の色だろうな」

「色って？」

「何がだよ」

「だからだよ。下着の色だよ」

彼が楽しそうに言うのはこのことだった。

「ほら、あいつのスカートってよ」

「ああ、あれな」

「ちよつとな」

彼女はスカートをかなり短くしているのだ。元々この高校のスカートは短くしているが女の子達はそれをさらに折って短くしているのである。その高見という女の子はその中でもさらに目立って短くさせていた。そうなる時々どうなるかはもう自明の理なのだった。

「だからな。いや、故意だぜ故意」

彼は真剣な顔でそれは前置きするのだった。

「それはな。本当だぜ」

「わかったからよ」

「それはよ」

皆その言い訳そのものの前置きには適当に返すだけだった。

「で、どうなんだよ」

「それでよ」

彼等は彼に対して問うのだった。

「何色だったんだよ」

「あいつはよ」

「白だった」

彼は真顔でかつ小さな声で仲間達に話した。

「白だったよ、見たんだよ」

「へえ、あいつがか」

「白だったのかよ」

「三角のところがちらりって見えただけだけだぜな」

高見を見ながら話すのだった。

「はっきりと見たぜ」

「白ねえ」

「意外だな」

彼等は本人に気付かれないようにして高見を見つつ言葉が続ける。

そしてその目線は彼女の足、とりわけその付け根に集中しているのは言うまでもない。

「もっと派手かと思ってたけれどな」

「意外と普通なんだな」

「そうだろ？ あいつあれで結構清純派みたいだぞ」

そして勝手にこんなことも言うのだった。

「どうやらな」

「そうだったのかよ」

「ああ、そうそう」

ここでまた一人が言った。

「久保はな」

「あいつかよ、今度は」

「そう、あいつだよ」

今度は細長い顔に丸いはっきりとした二重の目の女の子を見る一同だった。彼女にしろ美人である。どうやら美人の多い幸せなクラスらしい。

「あいつがこの前体育館に座ってる時に見えたんだよ」

「御前もかよ」

「俺だってたまたまだぜ」

彼もまた言い訳めいた言葉を出すのだった。

「そうだったんだからな。いいな」

「だからわかったよ」

「偶然だよな」

「そう、偶然なんだよ」

あらためてこのことを話すのだった。そうしてそれからだった。

「で、色はな」

「ああ、色は」

「何だったんだ？」

「ライトブルーだったよ」

それだったというのである。

第四章

「ライトブルーだった。もうはつきり見えたよ」

「あいつには合ってるな」

「そうだな」

今度はその久保という女の子を見ての言葉だった。

「ライトブルーはな」

「簡単に想像できるな」

「宇野はピンクだったぜ」

今度見られたのは小柄で垂れ目のおかっぱの女の子だった。

「風が見せてくれたんだけれどな」

「おいおい、それもラッキーだな」

「運がいいよな」

「そうだろ。奇麗なピンクだったぜ」

また笑顔で話す彼等だった。

「とてもな」

「可愛いのをはいてるんだな」

「そうみたいだな」

宇野に目がいく。どうやらこのクラスの男達はかなりの浮気者揃いのようなのである。

「あと長野もな」

「あいつもかよ」

「そう、あいつもな」

今度は薄茶色のふわりとした髪で垂れ気味のきらきらとした目の色の白い女の子を見るのだった。

「見えたんだよ、この前な」

「へえ、御前はあいつかよ」

「中々運がいいんじゃないね？」

「そうだろ」

その女の子の下着について話す男が言ってきた。

「階段を昇ってる時に下から見えたんだよ」

「また随分といいな」

「偶然だよな」

「当たり前だろ」

彼もまた決して狙ってはいないことを強調はする。

「わざと狙ってできるか？」

「いや、そう言われたらな」

「向こうもガードするしな」

これも当然である。誰も見せたくて見せるものではない。だからこそ見えるとなればやはり偶然しかない。あくまで偶然によるものである。

「だからだよな、やっぱり」

「偶然しかないよな」

「そうだよ。それで偶然見えたんだよ」

とにかく偶然なのだった。運に頼るしかない。

「本当にな。有り難かったよ」

「それで色は？」

「何色だったんだ？」

話が戻った。やはりそれであった。

「長野は」

「白か？ピンクか？」

「黄色だった」

それだったというのである。

「レモン色のな。はっきりとしたのだったぜ」

「おいおい、それもいいな」

「黄色かよ」

皆その長野という女の子をちらちらと見て話すのだった。

「あいつが黄色か」

「似合ってるよな」

「なあ」

「けれどよ」

しかしここで一人が言うのだった。深刻な顔になって。

「どうなんだよ。色はいいけれどよ」

「何だよ」

「柄はねえのか？」

彼が言うのはそのことだった。

「ストライプとか水玉とかよ。いねえのかよ」

「ああ、ストライプだったらあいっだぜ」

また一人が言ってきた。今度は細い目をして顔が細長い色白の女の子をこっそりと指差してだ。あくまでこっそりとではあるが。

「坪木がな。そうだったぜ」

「へえ、あいっがか」

「意外だよな」

「青と白の横縞のな」

そこまではっきりと確認したのだった。

「電車のプラットホームで帰り後ろにいたんだけれどな」

「その時に見えたのかよ」

「つうか列車が来てよ」

その彼は楽しそうに話す。

第五章

「その風でひらってなって後ろから丸見えだったんだよ」

「おいおい、いい車掌さんだよなその通過列車の車掌さん」

「神様だったんじゃないの？マジで」

「ああ、俺の視力が元に戻ったよ」

また随分と彼等にとって都合のいい神様である。

「一気に。おかげでな」

「すげえよな。その幸運ってよ」

「御前もついてるよな」

「俺もそう思うぜ」

誇らしげに胸を張って言った言葉だ。

「おかげでよ。いいものを見せてもらったぜ」

「あいつスタイルもいいしな」

「じゃあお尻のラインなんかも」

「ばっちりだったぜ」

そこまでのなだった。彼が見たのは。

「いや、本当によかったぜ」

「そうか。ストライブはあいつかよ」

「けれど水玉はいないのかよ」

「いるぜ」

しかしここでまた一人名乗り出てきた。見た人間がだ。

「おっ、いたか」

「それ誰だ？」

「あいつな」

その彼が満面の笑顔で指差したのは女の子達の中で一番背の高いショートヘアの女の子である。顔ははっきりとした顔立ちであり実によく日に焼けた顔をしている。

「中森な」

「へえ、あんな顔して可愛いのが趣味なのか」

「このミスマッチさがいいよな」

「そうだな」

そしてまた勝手な話をするのだった。

「白地に水色の水玉だったぜ」

「おいおい、それって余計にいいな」

「水玉はやっぱりその色だよ」

男組は実に楽しく話すのだった。

「で、何時見えたんだよ」

「何時なんだよ」

そしてまたこんな話になるのだった。

「階段か？電車か？」

「何処なんだよ」

「ああ、着替えてる時だけねどな」

「着替え？」

「あいつの部活の時だよ」

「そうさ。あいつホッケー部だよ」

中森のその部活の時のことであるらしい。

「着替えてる時に窓が開いててそこを通り掛かってな」

「御前もついてるなあ」

「何か皆ついてね？」

「なあ」

それぞれ自分達の幸福を噛み締め合う。

「皆見られてよ」

「そうだよな、本当にな」

「運がいいよな」

そんな話をしていた。だがそれはしっかりと聞かれていた。そう、聞いていたのは他でもないその下着を見られてしまった女の子達であつた。

「聞こえてるわよ」

「しかもしつかりとね」

「ねえ」

じつと男組を見ているが当の彼等は全く気付いていないのだった。それで相変わらずあれやこれやと話をしているのであった。

「それで黒はいねえのかよ」

「いねえな」

「ちっ、それはねえのかよ」

「流石に黒はないわよ」

「ねえ」

皆で顔を見合わせて話すのだった。

「それだけはね。絶対にね」

「ちよっと刺激的過ぎるからね」

「あとガーターとかもね」

話は随分と込み入ったものになっていた。

「黒ってねえ。かなりあれだからね」

「彼氏にも見せられないわよね」

「あれはね」

皆黒の下着に対してはかなり遠慮しているのがはっきりとわかる。

「だからね。それはないのに」

「何妄想してんだか」

こう言い合って醒めた目で彼等を見ているのだった。そうしてそのうえで彼女達の間で話をしていく。

「それにしても結構私達も隙あるのね」

「ええ、それはね」

「確かに」

男組の言葉はしつかりと聞いていた。

「これはいつも用心しておかないとね」

「全くね、もっとも」

しかしここで話が変わった。

「それはあっちもだけれどね」

「私達だって見てるんだから」

くすくすと楽しそうに笑っての言葉だった。

「体育の時間ジャージずり下げてるよね」

「そっから見えるわよ、トランクス」

「あと着替えの時も暑いからって窓開けてるから」

隙があるのは男組も同じであった。

「今時縦縞のトランクスは古いでしょ」

「それじゃあ彼氏にもてないわよ」

男組のうちの一人を見て楽しそうに笑いながらの言葉だった。

「あといい加減破れそうなトランクスは捨てなさいっての」

「ねえ」

女の子は女の子でそんな話をしていた。そして男組は男組で。

「ブラだって透けてるしな」

「っていうかブラウスから丸見えだしな」

「なあ」

こんな調子であった。こうした有様を見て人は何と言うか。どっちもどっち、五十歩百歩、そんな言葉しか出ないのではないだろうか。結局男も女も同じであった。

下着は何 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1384i/>

下着は何

2010年10月8日15時27分発行